

日本英学史学会 中国・四国支部

ニューズレター

No.69

Historical Society of English Studies in Japan, Chugoku-Shikoku Chapter

再現オランダ料理の不思議と感激

一年頭のご挨拶

竹中 龍 範

皆さま、明けましておめでとうございます。本年も支部活動の活性化に向けていっそうのご支援をお願い申し上げます。

昨年末、12月10日の土曜日、広島市区外との慣例にしたがい、岡山県津山市において通算第65回の例会が開催されました。津山での例会はこれが2回目となりますが、今回は会場に津山洋学資料館をお借りし、同館館長の下山純正氏による特別講演、岡山地区の会員による研究発表、同資料館見学と盛り沢山な、大いなる収穫を得た例会となりました。これはすべて、作州人の心意気とばかりに今例会をご準備くださった山田宗八先生のご尽力によるものですが、この勢いはその夕刻に設定された忘年懇親会にまで及んでおりました。

津山国際ホテルに設けられた懇親会場は壇上に「オランダ料理の夕べ」と掲げられ、結婚式披露宴のためかと思え、見まごうばかりのメニュー・席表を収めたパンフレットが用意されており、その表紙意匠は長崎出島の景でした。そしてそのメニューには「オランダ料理—大槻玄沢が長崎出島で食したオランダ料理の再現—」とありました。しかしてその味は、

実は、今例会のご案内を前回5月の総会時にいただいた際には、当時のオランダ料理をどのようにして再現しているのだろうかとの疑念を抱いておりました。レシピが残っているのだろうか。もしそうだとすると、それがどこまで忠実に再現できるのだろうか。まさに *QUAESTIO* の連鎖でした。そこで思い出したのが『日蘭交流の歴史を歩く』所収の越中哲也「出島オランダ商館の西洋料理」(1994)でした。本書購入時にはさほど関心のなかったこのテーマに俄に興味がわき、真剣に読み返しました。「鶏のケルリイ」や「豚のヒスツリ」とはどのような料理なのか、「牛の頭の料理 牛の頭の型のまま煮て、酢、しょうゆ、けしの油にて食す。オランダ語にて、コップハンデ・クーペイスという。」とはいかなる見栄え、いかなる味のものであろうか、等々。

こうして迎えた津山研究例会懇親会でしたが、開会前に仕組まれたシェフ直々の解説に興味を覚え、津山蘭学今に生きたりと思いつつも、気はその再現オランダ料理に移っており、乾杯を待つばかりでした。そして、meadによる乾杯のあとはまさに“*The way to a man's heart is through his stomach.*”で、大槻玄沢の舌鼓や箕作阮甫が飲んだ「白雪」、宇田川玄真の紹介した「ミード」を追体験し、堪能する夕べとなりました。

このようなものを英学史に求めようとするのとどのようなものがあるのでしょうか。日本の肉じゃがは東郷元帥がイギリスのビーフシチューを伝えたものであるとの説がありますが、わたしは、これは *Lancashire hotpot* が元ではないかと思っております。あの味はまさに肉じゃがのそれで、どなたかこれを検証していただければと願っております。

(香川大学/日本英学史学会中国・四国支部支部長)

平成23年度 第2回(通算65回) 研究例会 報告



2011年12月10日(土)、津山洋学資料館(岡山県津山市)において平成23年度第2回(通算第65回)研究例会が開催されました。支部会員19名を含む総勢50名の参加があり、大盛会となりました。

開催にあたり、津山洋学資料館館長 下山純正先生をはじめ、山田宗八先生、能登原昭夫先生には格別のご配慮を賜りました。心より篤くお礼申し上げます。

津山研究例会プログラム

日 時： 2011年12月10日(土) 12時30分 受付開始

会 場： 津山洋学資料館 GENPO ホール (岡山県津山市西新町5 TEL 0868-23-3324)

開会行事 (13:00~13:10) 支部長挨拶 竹中 龍範 (香川大学)

特別講演 (13:10~14:10) 司会： 竹中 龍範 (香川大学)

内科医学から自然科学へ：江戸蘭学界をリードした津山藩医宇田川家三代の活躍
下山 純正 (津山洋学資料館館長)

研究発表(1) (14:20~15:20) 司会： 松岡 博信 (安田女子大学)

津山英学の源流をさぐる：蘭学から英学へ
山田 宗八 (山田共学道場)

研究発表(2) (15:20~16:20) 司会： 馬本 勉 (県立広島大学)

おかやま英学の「流れ」と「つながり」：『おかやま英学史』出版をめざして
能登原 昭夫 (元山陽学園大学)

閉会行事 (16:20~16:30) 副支部長挨拶 田村 道美 (香川大学)

津山洋学資料館 館内見学 (16:30~17:20)

忘年懇親会 (18:00~20:00) 「オランダ料理の夕べ」

大槻玄沢が長崎出島で食したオランダ料理の再現。津山国際ホテルにて。

特別講演

内科医学から自然科学へ： 江戸蘭学界をリードした津山藩医宇田川家三代の活躍

下山 純正 (津山洋学資料館館長)

今回の津山研究例会では、津山洋学資料館館長・下山純正先生に特別講演をお願いし、「内科医学から自然科学へ：江戸蘭学界をリードした津山藩医宇田川家三代の活躍」と題するお話をうかがいました。

ご講演では、津山藩医を務めた宇田川家の三代、玄随(げんずい)、玄真(げんしん)、榕菴(ようあん)を取り上げ、蘭学のみならず自然科学の発展にも大きな貢献を果たしたことを紹介していただきました。インパクトのあるハンドアウトやパワーポイントのスライドを用いたお話は大変分かりやすく、興味深いものでした。コーヒーに「珈琲」の字を当てたのは宇田川榕菴であることなど、ご講演中に織り交ぜられた様々なエピソードに、聴衆はぐいぐい引き込まれていきました。

先生のご講演は、例会に続く館内見学や「オランダ料理の夕べ」と見事にリンクされ、津山洋学の豊かさを心に刻みつけてくださいました。心よりお礼申し上げます。



【参加者の感想】

◆蘭学研究の流れの中で宇田川三代が占める位置について資料を豊富に交えてお話いただき、特に榕菴の幅広い研究領域を今更乍らに認識いたしました。ふだんは英語教育史という観点から、蘭学のなかでも蘭語学というところに関心をもって調べたりしておりますので、このように医学、自然科学という分野での蘭学者の功績という視点で研究書等を読むことが少なく、後の資料館見学とあわせ、大いに興味を覚えました。有難うございました。こんどは是非、箕作のお話をと期待しております。

資料展観も前回の津山例会時にうかがった旧資料館にくらべてまさに **visitor-friendly** に構成されており、また、資料館の建築や資料の収集といったところに御地がこの箕作、宇田川を中心とした津山蘭学界をいかに誇りにされているかが窺われて、機を改めてゆっくりと伺いたく思いました。

<Dragon>

- ◆ご講演が宇田川家三代の活躍に的が絞られており、とても分かり易くためになるお話でした。これほどの人材を出した津山はすごい所だなと改めて感じ入りました。資料館の素晴らしい展示をもう数回じっくり見学したく思います。<もみじまんじゅう>
- ◆いつも郷土の先達を誇りに感ずることができる。

◆津山から多くの蘭学者や洋学者が輩出された歴史的経緯がよくわかりました。私は箕作阮甫一門の人材と業績については多少知っていましたが、宇田川三代の業績と貢献についてはこのたびに下山純正先生の御講演を通して知ることができ、津山英学の深さ、広さ、そして高さに驚嘆するとともに、大変勉強になりました。厚くお礼申し上げます。

<五十嵐二郎>

◆とても分かりやすい内容の濃い講演でした。現地でなければ聞けない貴重なお話でした。ありがとうございました。<YH>

◆下山津山洋学資料館館長様の特別講演では、貴重な資料をいただき感謝いたします。鎖国中にもかかわらず、蘭学者、医学者(特に津山の医学者)は国、言葉を越えて努力し、学問的意欲で必死に奮闘したことを学び感動しました。<三浦省五>

◆日本の文明開化に多大の貢献をした洋学者たちのお話はとても刺激的でした。昔の面影の残る津山の街並み、会の始まる前に見学した展示資料、そして、館長さんのご講演を拝聴して、点と点が結びれていく、そんな思いでした。<Rainbow>

◆エピソードが最高におもしろかったです。

<井尾佳弘>

◆江戸から遠く離れた津山藩に、日本の医学、洋学の近代化に貢献したこれほどの人物がいたことを、岡山県内にいながらほとんど知らなかったことを恥ずかしく感じた。現在も使われている「珈琲」とい

う表現も作り出したこと等、下山館長の具体的な説明が興味深かった。<JH 4 DGW>

◆シロートでもわかりやすく教えて頂きありがとうございました。<中西>

研究発表(1)

津山英学の源流をさぐる：蘭学から英学へ

山田 宗八(克惟)(山田共学道場)

【発表を終えて】

津山藩医宇田川玄真、宇田川榕菴、箕作阮甫、宇田川興斎、箕作秋坪が、幕府の和解御用として1813(文化10)年から1863(文久3)年までの50年間国事のため奔走する。

この間、1853(嘉永6)年突然マシュー・ペリーが浦賀に来航したことにより蘭学から英学への転換が急務となり、蕃書調所において、その対策を講じる必要性が生じた。

1859(安政6)年堀達之助はその語学力を買われて蕃書調所に迎えられた。堀達之助を中心に、一大事業として英和辞書「英和对訳袖珍辞書」が1862(文久2)年に出版された。袖珍辞書編纂に協力した者の中に津山藩医箕作阮甫の孫、箕作貞一郎(麟祥)がこの事業に携わっていたのである。

宇田川興斎が1857(安政4)年に発行した蘭文英文典「英吉利文典」、開成所が1862(文久2)年出版の「The Elementary Catechisms, English Grammar」などが存在する。

英国人医師ウィリアム・ウイリスが1862(文久2)年日本到着3ヶ月後に生麦事件に遭遇、生麦事件を契機に薩英戦争1863(文久3)年、幕藩体制が崩壊、戊辰戦争[1868(明治元)年~1869(明治2)年]と激動と変革の時期に官軍の従軍医師として敵味方なく負傷者の治療をする。

その英国人医師ウィリアム・ウイリスが12代津山藩主松平三河守慶倫公に宛てた一通の手紙(1869(明治2)年12月30日)により「儀姫」の手術を決断した津山藩医達の英語の習熟の高さと、激動の幕末維新に、津山藩蔵書として「英和对訳袖珍辞書」が存在することは歴史の動向と日本の将来を見据えた指導者の見識と崇高な精神があったとみるべきだと思う。



◆山田先生のたくさんの資料の提供と丁寧な解説に感謝いたします。このような蘭学・英学の動向は日本の他の地域ではどうであったのか、これほどの勢いがあったのか、興味がわいてきました。

<三浦省五>

◆生麦事件をこれほど多くの資料で詳しく伝えていただいたことはないので、山田宗八先生のご準備に対するご努力に深く感銘を受けました。おかげで当時の状況が大変よく分かりました。どうもありがとうございました。<マッピー>

◆まずもって、山田先生の大部の資料に驚いた。これだけの資料を作るために全国各地に足を運ばれて収集され、それを綿密に解説されたことに敬意を表

したいと思います。日本の英学の発展に貢献された宇田川三代の業績をはじめ、江戸末期から明治にかけての数々の資料は大変貴重で、授業でも使わせていただきたいと思います。<JH 4 DGW>

◆津山英学の「源流」が時代とともに「大河」となっていく過程が良く理解できました。山田先生の学問的情熱・エネルギーに圧倒されました。

<もみじまんじゅう>

◆山田先生のパワーがそのまま伝わってきました。津山の地で先生の発表を聞いて、宇田川家の再来のように感じられました。生麦事件の貴重な資料、写真を見ながらの先生のご講演は、臨場感あふれていました。<YH>

◆素晴らしい詳細な資料の展開と熱意あふれる先生の説明にただただ目を見張るばかりでした。安政年間の堀達之助による『英和对訳袖珍辞書』発行にまつわる箕作麟祥の参加と活躍、文久2年の生麦事件の発生と津山藩の医師たちの英語を通しての活躍は、まさに現今のコミュニケーション英語の濫觴ともいえるのではないのでしょうか。ありがとうございました。<五十嵐二郎>

◆蘭学から英学へ、津山が生んだ宇田川、箕作等の活躍ぶりを感心しながら聞いていると、「堀達之助」の名前に思わず耳がダンボになりました。「英和对訳袖珍辞書」の編纂に箕作貞一郎が携わっていたという。だから、歴史は面白い、そう思った瞬間です。また、お忙しい中、膨大でわかりやすい資料をありがとうございました。<Rainbow>

◆大変具体的な資料を見せていただき、本物に触れる感動を味わうことができました。<井尾佳弘>

◆興味深い。

◆当時の津山と江戸（日本の中心）との情報の速さや、諸外国の関心の高さがよくわかった。<中西>

◆津山の英学を幕末期に遡って調べようとの熱意あふれるご発表を伺いましたが、やはり日本英学史の全体像をしっかりとらえられた上で津山英学を再評

価されないと、折角のご研究がしかるべき評価を得にくいということになりますので、一層の深化を期待いたします。

例えば、宇田川の『英吉利文典』について、開成所の木の葉文典 *The Elementary Catechisms: English Grammar* と混同されているかのようなお話しがありましたが、宇田川版『英吉利文典』は、開成所のものと同名ながら、こちらはオランダの学校教科書 *Vergani* の英文典を翻刻したものです。また、「対訳袖珍」の版の同定も問題があります。第2版と言っておられましたが、発表資料の写真は慶應3（1967）年の、文久版から言えば第3版にあたりますし、2冊のうちの1冊——発表資料 p.42, 及び p.52 の下のもの——は、明らかに、徳川家出入りの藏田屋が同家の許可を得て慶應3年版の版本を用いて明治2（1869）年に再刊したもので、第4版にあたるものです。

津山英学の中でも箕作の系統は江戸、東京での活躍となりますが、その再評価とあわせ、御地での英学研究という分野もぜひさらなる発掘を進められ、その成果をご発表いただければと願っております。

<Dragon>

研究発表(2)

おかやま英学の「流れ」と「つながり」： 『おかやま英学史』出版をめざして

能登原 昭夫 (元 山陽学園大学)

研究の目的・出版の動機

福武財団から助成金を授与されたのを機に、おかやま（岡山）における英学受容の歴史を出版する。故松村先生が唱導された「点から線へ、線から面へ」の遺訓を守り、統括的研究をめざした。

研究方法と時代区分

研究員の歴史観に相違があるので、共通認識として「流れ」と「つながり」の二つのキーワードを設定して統一を図った。ペリー来航から六高までを研究対象とした。(1853~1900)

執筆者と内容

当学会員6名と5名の寄稿者に執筆をお願いした。内容は二部から構成し、総論と各論に分けて、3つの「流れ」と、4つの「つながり」を特徴づけた。

今後の課題

本書を三部作の上巻とし、中・下巻のために「同学の土」を発見・育成したい。「流れ」「つながり」に続いて「つながり」を課題とする。

研究成果

平成24年3月30日 発行予定。



◆お話にあったように歴史学研究の方法に則ったご研究による『おかやま英学史』のご刊行を楽しみにしております。地元びいきの郷土史ではなく、日本英学史の流れを背景に据えて、おかやまの英学を発掘し、分析し、しかるべき位置づけをされた研究書として、3部作の門出をお飾りいただければと祈念いたします。

中国・四国支部の前身、広島支部が発足した際には『広島英学史事典』を作るとの構想がありましたが、諸般の事情で沙汰止みとなったかの感があり、先を越されたと思いつつも、わが支部の活動として日本英学史学会本部に誇れる業績が著されることは大いなる喜びです。<Dragon>

◆能登原先生は、昔から存じ上げており、岡山県の英語教育界の重鎮であられて、個人的にも大変お世話になっておりますが、今回の発表を聞き、高齢になられても岡山県の英学の紹介にかける先生の並々ならぬ意気込みに感嘆しました。小川芳男先生は『英語教授法辞典』をはじめ数冊の著書により存じ上げており、また、存命中に講演をお聞きしたことがあり、岡山県出身だと存じておりましたが、大塚高信先生、矢野峰人先生は、その著書は所有しております、いろいろ勉強させていただいておりますが、岡山県出身だとは知りませんでした。改めて両先生の著書をひもといてみたいと思いました。

<JH4DGW>

◆能登原先生の発表を聞いて、先生を中心とした「おかやま英学史研究」の努力とその出版企画に敬服するとともにその成功を信じます。研究により「点」が「線」となり「面」となり、それを蓄積することにより、必要に応じて「立体」にするための基礎資料となりうるものであります。「立体」にし、「移動」するのは誰でしょうか。まず、こうした史実を蓄え、正しい解釈と正しい記述・記録を残すことが必要であると思います。<三浦省五>

◆大変楽しく聴くことができました。<中西>

◆「おかやま」英学研究の充実ぶりを感じました。三部作を読むのを楽しみにしています。わが県でもいつか同じ企画ができるよう頑張ります。<YH>

◆『おかやま英学史』の出版企画、素晴らしい内容構成になっていると思いました。研究のターゲットが恣意的、便宜的、主観的と謙遜なさっておられましたが、そんなことは決してなく、とてもよく検討された章建てと拝見しました。歴史認識の在り方についてですが、凡人は「過去」、「現在」、「未来」の3相ですが、能登原先生は「未来」のもう一つ先の「あの世」までの4相をご披露になりました。とてもスケールの大きいお話でした！

<もみじまんじゅう>

◆人生経験豊富な能登原先生のお話しは胸に響くものばかりでした。「歴史事実」と「歴史認識」には違いがある—それを踏まえた上で「点から線へ、線から面へ」を実現すべく、おかやま英学の「流れ」と「つながり」—『おかやま英学史』のご出版を楽しみにしています。そして、三部作が完成されるまで、いえ、それからもずっと、ずっと、お元気で活躍ください。<Rainbow>

◆おかやま英学の「流れ」と「つながり」から『おかやま英学史』への成立と発展が期待されるどころ大なるものがあります。能登原先生をはじめ有志の先生方による上・中・下巻の三部作は岡山の漢学、蘭学、英学の「流れ」と「つながり」が「点から線へ、線から面へ」と亡き松村幹男先生の御魂へ届くことでしょう。これからの更なる御研究、御研鑽を期待し、祈念いたします。<五十嵐二郎>

◆面白く有意義。

◆「おかやま」で教員をしながら、知らないことも多く、出版されればぜひ読ませていただきたく思いました。<井尾佳弘>

◆点から線、線から面というのは、研究という過程を巧みに表す言葉であると思います。先生方のご著書の完成を楽しみにしております。<マッピー>

研究例会全体についてのコメント

◆漢学、蘭学、英学、医学を通して、幕末・明治初期の日本をリードしてきた津山のにおいかおりに満ちた洋学資料館での研究会に文句をつける何物もありません。そのうち気の合う友人たちと再度オランダ料理に在り付きたく願っています。

<五十嵐二郎>

◆英学史学会にふさわしい雰囲気、準備万端整った会場で興味深い発表等を聞き、とても有意義な会

だったと思います。

また、忘年懇親会では珍しい料理を味わうことができ、いろいろな方とお話でき、楽しい時を過ごすことができました。

毎回のことながら、このような素晴らしい会の計画・準備・運営にあたられた事務局関係者に深く感謝したいと思います。ほんとうにお世話になりました。<JH4DGW>

◆これまで同様、実に周到な準備がなされた例会で、実り豊か、参加しがいのある例会でした。「オランダ料理」の企画は最高でした。津山の底力を実感しました。〈もみじまんじゅう〉

◆津山市全体で歓迎して頂いた様で現地の特色あふれた素晴らしい研究会でした。事務局の馬本先生、現地の山田先生にお礼申し上げます。ありがとうございました。〈YH〉

◆今回は、英学史学会に最もふさわしい雰囲気の会場を選んでいただきありがとうございました。

〈三浦省五〉

◆地元津山の方のご参加をいただき、ここ近年の中では参加者の多い例会で、久しぶりに緊張しました。さすが多くの洋学者を生んだ津山人の意識は違いますね。また、ご準備をしてくださった事務局の馬本先生、地元の山田先生、本当にありがとうございました。〈Rainbow〉

◆恒例の研究発表に加えて特別講演・資料展観と、充実した研究例会でした。その上、夕刻の懇親忘年会は長崎出島のオランダ料理再現ということで大いに盛り上がり、蜂蜜酒や超レアものの日本酒など、大いに堪能いたしました。『日蘭交流の歴史を歩く』に所収の「出島オランダ商館の西洋料理」を読んで楽しみにしていたところもありますが、まさに百聞は一見に如かず、否、百読は一味に如かずでした。

今研究例会を万端に亘ってご準備いただいた山田先生を初め、関係の方々のご高配に篤く御礼を申し上げます。〈Dragon〉

◆有意義。

◆今回の例会開催にあたり、山田共学道場、ならびに津山洋学資料館のスタッフの皆様には、縁の下の力持ちとして、大変なご苦勞をおかけいたしました。会を支えてくださった皆様のご助力に対し、改めて厚くお礼申し上げます。ありがとうございました。

中国・四国支部ニュース

》》平成23年度第2回理事会

2011年12月10日(土)、津山例会に先立ち、理事会を開催し、今年度の活動報告および平成24年度活動計画について協議しました(出席者7名)。

当日の協議とその後の調整の結果、来年度の支部総会ならびに第1回研究例会は、2012年5月26日(土)に広島地区にて(会場は未定)、第2回は12月8日(土)に広島地区以外で開催の予定です。

例会における研究発表受付のありかたについても協議し、申し込み期間を明示すること、申込多数の場合は時間調整を行うことなどを申し合わせました。

》》『英學史論叢』第15号原稿募集

ニューズレターNo.68でお知らせしました通り、中国・四国支部研究紀要『英學史論叢』第15号(2012年5月発行予定)の原稿を募集します。研究論考、研究ノート、英学史随想、英学史時評、書評等、会員の皆様の積極的なご投稿をお待ちしております。

- ・ご投稿に際しては、ニューズレターNo.68、および『英學史論叢』14号に掲載の「執筆要領」「標準書式」に従ってください。
- ・原稿提出の締切は、**2012年2月20日(月)**(消印有効)です。事務局まで郵送してください。
- ・研究論考・研究ノートの投稿は正副計3部、英学史随想・時評・書評の原稿は1部お送りください。

》》新入会員

齋藤浩一(さいとう こういち)氏
東京大学大学院生。専門は英語教育史、研究分野は学校文法史。

》》訃報

田村一郎先生(副支部長)
平成24年1月1日にご逝去なさいました。
謹んでお悔やみ申し上げます。

英学史学会全国ニュース

》》「日本英学史学会報」No.126

- 2012年1月1日発行。内容は、以下の記事など。
- ・新年の個人的な宿題(会長 北垣宗治)
 - ・《英学史散策》チェンバレン・杉浦文庫：愛知教育大学の至宝(加藤詔士)
 - ・《調査資料》洋学史(江戸)散歩(2)：高橋景保とシーボルト(源空寺)(堀 孝彦)
 - ・《追悼》広島支部の屋台骨を支えられた松村幹男先生(竹中龍範)／松村幹男先生を偲ぶ(石原千里)

英学史情報ひろば

◇安部規子(2012).『修猷館の英語教育 明治編』海鳥社(本体1,700円)

平成24年度第1回(通算第66回)研究例会発表者募集

平成24年度第1回(通算66回)研究例会を、2012年5月26日(土)に広島市内で開催の予定です。研究発表(持ち時間は質疑応答を含めて60分程度*)を希望する会員は、(1)発表題目、(2)発表者氏名(所属)、(3)発表概要(200字程度)、(4)使用予定機器、以上4点について明記の上、事務局までお申込みください。

申し込み先 ・メール eigaku@tom.edisc.jp
・ファックス 0824-74-1724 (馬本研究室直通)
・郵送 〒727-0023 広島県庄原市七塚町562 県立広島大学 馬本研究室

申し込み受付期間: 2012年3月1日(木) ~ 3月31日(土)

* 申込者多数の場合は、時間調整を行う場合がありますので、ご了承ください。

広島英学史の周辺(35) 元旦に映画を見に出かけたのは初めての事です。『山本五十六』。広島、英学とも無縁でないこの映画、世界をどう見るべきかを考えさせられました。▼その最中に悲しいニュースが届きました。副支部長の田村一郎先生に初めてお会いしたのは、千田町の広島大学総合科学部での例会だったでしょうか。後に比治山大学へお迎えし、先生のおだやかなお人柄と深い学識に触れる日々を送りました。お会いするたびに、いつも温かいお言葉をかけてくださった田村一郎先生、どうか安らかに眠りください。▼庄原市田園文化センターには、庄原出身の作家・倉田百三の資料を集めた文学館が併設されています。その「文学館講座」として話をする機会に恵まれました(1月12日、1月26日)。1回目は「英学史の中の倉田百三」、2回目は「百三と『英語青年』」。▼倉田自身が「英学の人」というより、彼の周りに「英学の気(け)」が溢れています。その一つは代表作『出家とその弟子』の英訳(グレン・ショー)。出版時に『英語青年』に掲載された広告と福原麟太郎による短評。ショーの協力者・奈倉次郎のこと。わが学会の野村勝美先生は『出家』や『愛と認識との出発』に関するご論考を発表していらっしゃいます。▼安藤貫一によって『俊寛』が英訳され、『英語青年』誌上に連載されました(大正11年~14年)。連載をまとめた一冊(研究社刊)には、勝俣銓吉郎が序文を寄せ、流刑地で非業の死を遂げた俊寛と、出版の前に英国ワイト島で客死した安藤貫一のsimilarityに言及しています。こうしたあれこれが、倉田に「英学の気」が纏わりついていることを思わせます。▼ショーと安藤という、日本文学を海外に伝える上で欠かせない二人によって訳された百三作品は、日本の英学界にどのような影響を与えたのでしょうか。両氏の英文を、当時の英学徒が英文を書くお手本とした、と考えることはできるでしょう。▼百三の原作に

は、英訳する上での「構文」が見えてくるような日本語が随所にあります。例えば『俊寛』に、「わしをきらってくれ、きらってくれ。わしはそれに相当している。」

(安藤訳: Hate me, do hate me! for I deserve it.), 「わしを一人残すほどなら、むしろわしを殺してくれ。」(安藤訳: Kill me rather than desert me!) など。▼『英語青年』を参照するには復刻版が便利ですが、せっかくの機会なので、受講生の皆様には、大正期の現物を見てもらいたい。そう思って部屋の中を探してみると、薄い表紙に目次も記されたバックナンバーがいくつか出てきました。たまたま「大正16年1月1日発行」の号を見つけ、驚きました。大正15年12月半ばの校正の後に、大正天皇の崩御(12月25日)を迎えたのです。そのため『英語青年』には、「昭和元年(1年)」の日付を記した号はありません。▼講座終了後、百三のことを庄原からもっと発信したいと取り組んでいらっしゃる研究者の方から、「百三コーヒー」を頂戴しました。百三の肖像画に「青春は短い」の言葉が添えられた切手とともに。▼倉田の関係資料を放り込んだ段ボール箱(私はこれを「百三箱」と呼んでいます)をひっくり返し、あれこれ準備をしながら思いました。「やっぱりこの時間が楽しい」と。▼厳しい寒さが続きます。どうか皆様ご自愛ください。(馬)

日本英学史学会 中国・四国支部ニューズレター No. 69

2012年1月30日発行

発行 日本英学史学会中国・四国支部(代表 竹中龍範)

事務局 〒727-0023 広島県庄原市七塚町562

県立広島大学 馬本研究室内

電話 & FAX: 0824-74-1725 (研究室直通)

e-mail: eigaku@tom.edisc.jp

ホームページ <http://tom.edisc.jp/eigaku/>

郵便振替口座 01360-9-43877 日本英学史学会中国・四国支部

Newsletter No.69 January 30, 2012